

王將について

萩庭 勇

はじめに

この二字は、云うまでもなく將棋に係る言辭である。「事」として執らえる視點からすれば寸言も加える必要はない。従って蜀犬吠日の誹り有るを恐れる。が敢えて管見を提することとした。それは「辭」としての視點に換えて表皮を剥ぐと古代（原形）の本來の姿が發現できると思うからに外ならないのである。

一、「王」字について



前述の如く本來の姿を探るキーワードは那邊に在るのか？ 管見によれば、それは「王將」の「王」字に在ると思う。ことばを換えれば「王」字と「王」（無點玉）字との混淆に在るのである。當然のことながら本來「王」（キング）字と「王」（無點玉）字とは明白な區別があったにも拘わらず、いずれの時からか曖昧模糊となり今日に至ったのである。ここに「王」（キング）字について説解すれば、この「王」字は横劃の三本を、上から一・二・三とすると、一と二の

間隔は狭く、二と三との間隔は前者(一と二)に比べて廣い構造になっているのである。これを金文で示せば「王」である。この字はこれまでの中國および日本の多くの先賢の説解によれば大斧(まさかり。古語風にいえば「よき」)であるという。が、何故に大斧の意味のこの字が「王」(キング)を意味する字になったかについては、また中國および日本いずれの先賢・專家も寸言すら言及していないのが現状であり、また摩訶不思議なことと言えなくもないのである。管見によれば、それは《王》字、つまり大斧が、いわゆる「王」(キング)字になったのは《古代の王(キング)のキャラクターが色濃く係わっていると估計している。それは「王」(キング)字に係る「枉」字や「匡」字がいささか、いや大いに語っていると、これまた估計するのである。「枉」字も「匡」字も論語などでは、いわば抽象的な「心の在りよう」についての意味に使用され、具體的な「形の在りよう」については使用されないのである。尙、「王」字と「枉」字「匡」字の係わりについては後日の機會に論述したいと思う。が、ここに寸言觸れると「枉」字と「匡」字は相反する概念を含有するのである。共に「曲」が共通の意味である。つまり「枉」字は、「曲」であり、「匡」字は、「正」である。これは偶然の一致ではないのである。

二、「玉」字について

この字は、「王」(キング)字よりもより複雑である。その形を提示すれば、「王」(無點玉)と「玉」(一點玉)と「玉」(二點玉)の二つの形が存在するのである。が、通常はその中の「玉」(一點玉)字だけがいわば三字を代表しているのである。ことばを換えれば、初めの「王」(無點玉)字はいわゆる「王」(キング)字の陰に隠れて見えないのである。最後の「玉」(二點玉)字は、先賢ですら『古文において「玉」(二點玉)に作って「()」の形があるのは、特殊

な形でわからない』(漢字の起原玉字下)と言っているほどであり、他(日中を問わず)は推して知る可しである。因みに、斯界の泰斗白川靜博士はその巨著「字通」においては、此(二點玉)について寸言も付していないことを附記する。極く一般的な言い方をすれば多くの専門家すら眼中にないのであるから當然と言えば當然である。

管見によれば、「王」(無點玉)字・「玉」(一點玉)字・「玉」(二點玉)字は密接不離の關係に在ったと思うし、今日もそれを保存しているのである。假に「王」(無點玉)字を①、「玉」(一點玉)字を②、「玉」(二點玉)字を③とすれば、①は完成の段階にあり、いわゆる「完璧」そのものであることを示しているのである。②は完成に近づいた段階にあり、いわゆる「半ば完璧」。③は初期の段階にあり、いわゆる「粗削り」を示す。これを反轉させると③から②へ、②から①へと發展、そして完成(度)を示したと比定するのである。一體古代の漢字作成に係わった當時のインテリたちは、「動くもの」、或いは「或る動作」をどのように線劃に表したか、つまり漢字にしたかと云うことは、これまた中國および日本の先賢たちも言及していないのである。管見によれば「一點乃至二點」或いは「漢字の部分の反轉」によって表現したと估計するのである。「估計」と記述したがこれは單なる想像ではない。その「一點乃至二點」による動作の表記の代表こそ、「玉」(一點玉)字であり、「玉」(二點玉)字なのである。またこれについて附言すると「曾」字、「爾」字などもその埒内に在るのである。つまり「曾」字の上部の「八」、「爾」字の上部(横一下)の「八」はどちらも或る動作を示しているのである。「曾」字の「八」は湯気の上昇であり、「爾」字の「八」は旗頭の回轉を表示しているのである。また「反轉」の代表は「雲」字である。古文の雲字はと書き、またと書くが、前者が古形であり、後者はその反轉である。楷書化され更にその上に雨冠が載って今日の形を成したのである。

三、將棋の玉金銀について

右の一以及二に述べたことだけでは、立場を換えると獨斷の坩堝に在るとの誹りを蒙る危うさ無しとしない。そこでそれを補完する意味で玉金銀について些か記述することとする。これも一瞥して王將二字と同様に、「事」としては明白であり、説解を必要としない、いわゆる將棋に係る用語である。が同時に「ものの品第」を明白に示している點でより重要である。つまり「銀」よりは「金」、そして「金」よりは「玉」が上であることを明示しているのである。「玉」が最高なのである。そうは云うものの將棋の世界では「玉將」戦と云うタイトル爭奪は無いのである。これぞ正しく「王」（無點玉）字がいわゆる「王」（キング）字に隠れてしまった證左なのである。しかし目を皿にして見ると、王將戦と言いつつもいざ對局となると「王將」（無點玉）と「玉將」（一點玉）とは、上段者が「王將」（無點牌）を使用し、下段者が「玉將」（有點牌）を握るとのことである。これは實に興味の涌く一面である。視點を換えるといわゆる「王將」（キング）の陰に本姿が見え隠れしていることに外ならないのである。尙、將棋は本來インドに生まれ、東漸して秦旦へと傳播し、その当初は「象戲」と言ったとのこと。加えて日本の將棋は秦旦からの傳來ではなく、東南アジアを通過して傳來したとのことである。それかあらぬか中國のそれと同一でないのである。因みに西方に進み歐州に傳播したのは國際將棋と言われるチェスである。

四、萬葉歌の玉金銀について

ここでは當然のことながら外行である拙者が萬葉歌について論述しようとするものではない。つまるところ山上憶良の秀歌を「物品の品第」に延用するだけのことである。秀歌は人口に膾炙する「銀も黄金も玉も何せむに優れる寶子にしかめやも」(『萬葉集』八百三)である。作者の意は無論子供の崇高さを謳わんとしたのである。が、さすがに七百三に遣唐小録として秦旦に遊學し、長安の知識を滿身に蓄えて歸國した結果の産物なのである。客觀的にみればとりもおさず「物品の品第」を明示しているに外ならないのである。これを要するに「玉」「金」「銀」の三者に在っては「玉」が上位に在るとの證左である。これを將棋に延用すると「王」(キング)ではなく、「玉」(無點玉)なのである。その最上位に在るを説明して餘りあるのは、古來「玉」字を冠する「玉璽」を嚆矢とする多數の熟語である。この視點を是とすれば「玉」が至高の位置に君臨した専用物であったことは當然の歸結である。因みに江戸の末期に福岡の黒田藩の領地より出土したいわゆる「金印」は殊の外有名であり、國寶と成ってはいるが、客觀的に受け止めるとランクは下と言うことに他ならないのである。

おわりに

王將の二字は、その結論を言えば「辭」の視點からすれば錯誤なのである。が先述のように「王」(キング)と「玉」(無點玉)との形體から混淆を將來させたのであり、今更それを矯正せねばなどと主張するものではないことを附記する。形體の混淆について述べたが、或いは發音からの混淆があったかとも思われるのである。それは「玉」字の發音「オク」である。更に加えて「玉」「金」「銀」各牌下に附隨する「將」字が「王將」(キング)の名稱を醸成する要素であったかも知れない。「王將」は本來「おうしょう」に非ず、「ぎょくしょう」であったのである。叱聲を引頸して等

つ次第である。

平成十五年 在魯魚魯齋三脚坊記之

*拙文中一部所謂「玉」字を理に合わせて作字せず、「王」字に加點したことを附記する。